ヴァシリ・カンディンスキー《夕暮れ》1903年
ヴァシリイ・カンディンスキーの木版画

古田 浩俊
カナディンスキーの版画

カナディンスキーの芸術に対して決定的な役割を果たしていると考えるのは自然である。そこで、初期版画の一例である「夕暮れを考察する」にあたり、まずはカナディンスキーの版画について概観した上で、当該作品そのものを多角的に検討し、次にカナディンスキーが生まれ育った時代のロシアと西欧の影響を振り返るとともに、「夕暮れ」の関わりを探っていくことにする。

カナディンスキーは一九一四八月ごろのミュンヘンの書画美術における自身の位置を占める場であり、絵画や写真画の技法を習得する。この時期、カナディンスキーは版画に没頭し、版画家としてのキャリアを開始する。彼の版画は、版画の枠を破壊し、新たな表現の可能性を模索する。

カナディンスキーの版画は、自己表現のための手段としての版画を追求していた。彼は版画を通じて、自分の思考や感情を表現し、その思考を世界に発信することを目的としていた。その結果、カナディンスキーの版画は、表現の自由と個性の表現を追求する時代の象徴となり、当時西欧の美術界に大きな影響を与えた。

カナディンスキーは、版画を通じて、自己的思考や感情を表現し、その思考を世界に発信することを目的としていた。その結果、カナディンスキーの版画は、表現の自由と個性の表現を追求する時代の象徴となり、当時西欧の美術界に大きな影響を与えた。
二分類

レーテルは様式と技法に基づいてカンディンスキーの版画を次の五つに分類した。

I. 九〇八九〇〇
II. 九〇八九一九三年
III. 九三一九六年
IV. 九三九三九三年
V. 九四四

この分類の従うは「夕暮れ」に属している。Iに分類される版画がIIの版画と異なるのは、後者が一枚の版画に色を用いて色の数だけの版画を使い、油で溶かした顔料で重ね塗りしている。一方で、前者ではほとんどの場合一枚の版画だけを使い、色を用いて色の数だけの版画を使っている。Iに分類される版画がIIに分類される版画とは、その考え方を含めて異なる。Iに分類される版画のカラーは、特に黒と白で、IIに分類される版画のカラーは、特に色で、色の数だけの版画を使っている。

三初期版画の影響関係

レーテルは初期の白黒の木版画における芸術上の起源について、もしそれがあったとしても断定するのは困難である。カンディンスキーはこの事実を認識しているが、そのうちは三万年には新しいムヒンに焦点を当てている。Iに分類される版画は、彩りや色の変化が版画の「平面的な様式」に影響を及ぼしている。またカンディンスキーは、この版画の影響を『Phalanx』と呼ばれるロシアの民衆版画から、影響と同様に漠然としたものであるという慎重な態度をとっている。一方
でカンドインスキーや一九○四年にミュンヘンでヴァロッホンの絵画展を開いていることを挙げて、交錯する
白と黒の平面が同時代の誰の版画よりもヴァロッホンのそれにより密接に関連していると指摘している。
一方でパネッティはカンドインスキーの初期版画について、一九〇四年の第一回ファーランス展（新印象
派展）でカンドインスキーがヴァロッホンの作品を入れているのだから、カンドインスキーがヴァロッホンの
分離派展で展覧された作品の方がより近い関係にあると述べて、カンドインスキーやヴァロッホンの
の分離派展で展覧された作品の方がより近い関係にあると述べて、カンドインスキーやヴァロッホン
の分離派展で展覧された作品の方がより近い関係にあると述べて、カンドインスキーやヴァロッホン
の分離派展で展覧された作品の方がより近い関係にあると述べて、カンドインスキーやヴァロッホン
の分離派展で展覧された作品の方がより近い関係にあると述べて、カンドインスキーやヴァロッホン
の分離派展で展覧された作品の方がより近い関係にあると述べて、カンドインスキーやヴァロッホン
の分離派展で展覧された作品の方がより近い関係にあると述べて、カンドインスキーやヴァロッホン
の分離派展で展覧された作品の方がより近い関係にあると述べて、カンドインスキーやヴァロッホン
の分離派展で展覧された作品の方がより近い関係にあると述べて、カンドインスキーやヴァロッホン
の分離派展で展覧された作品の方がより近い関係にあると述べて、カンドインスキーやヴァロッホン
の分離派展で展覧された作品の方がより近い関係にあると述べて、カンドインスキーやヴァロッホン
の分離派展で展覧された作品の方がより近い関係にあると述べて、カンドインスキーやヴァロッホン
の分離派展で展覧された作品の方がより近い関係にあると述べて、カンドインスキーやヴァロッホン
の分離派展で展覧された作品の方がより近い関係にあると述べて、カンドインスキーやヴァロッホン
の分離派展で展覧された作品の方がより近い関係にあると述べて、カンドインスキーやヴァロッホン
の分離派展で展覧された作品の方がより近い関係にあると述べて、カンドインスキーやヴァロッホン
の分離派展で展覧された作品の方がより近い関係にあると述べて、カンドインスキーやヴァロッホン
の分離派展で展覧された作品の方がより近い関係がある。
画面は左下から右下を斜めから右上を結ぶ対角線によって、右下部分と左上部分に大きく分けられる。右下部分はこの作品の前景にあたり、女性の姿がそのほとんどがスペースを占めている。女性は円形の해를 그림에 넣는 빅파이의 양 모습을 그려 놓고 있다。iphery에서의 "夕暮れ"를 묘사하기 위해서는、愛知県美術館では「夕暮れ」という主題を採用している。

中景では、輝く空を表現しながら、画面から見える部分を強調している。特に、アートュルの色彩は大きく、青緑色の台紙に表記されている。この作品のタイトルは、「マフをかぶる女」（九〇年）と比較して、色彩と構成が異なっている。また、KANDINSKYのサイン、「Abend」の題名は、同じく、1920年に制作された作品番号が付けられている。
色版を使用／様々な色彩で和紙と手漉き紙に手刷り／G.M.532: 244x146mm
アルベルティーナ・ウィーン 244x146mm

第四ステート

現存するプリントから四つのステートがあることが推定されるが、プリントによる異同は、実際にはステートが
異なるているのか単に刷りによって生じた違いなのかはっきりと区別できないことがしばしばあるということを
考慮しなくてはならないとレーレンは言う。実際、夕暮れをとっただけでもカタログ上、ロゼネ内に矛盾が見
られる同書には第二ステートのG.M.532図（10）と第四ステートのG.M.532（図13）の他に、種類として第三ステートのG.M.532の図版（図9）が掲載されている。第一ステートでは「スカラーの模様は黒地の上の色の柄をどのように見るか」という点に
関心をもつ。紙の種類から試刷り、（広告）でも第四ステート（包装紙）でもない。紙の種類から試刷り、（広告）でも第四ステート（包装紙）でもない。紙の種類から試刷り、（広告）でも第四ステート（包装紙）でもない。紙の種類から試刷り、（広告）でも第四ステート（包装紙）でもない。紙の種類から試刷り、（広告）でも第四ステート（包装紙）でもない。紙の種類から試刷り、（広告）でも第四ステート（包装紙）でもない。紙の種類から試刷り、（広告）でも第四ステート（包装紙）でもない。紙の種類から試刷り、（広告）でも第四ステート（包装紙）でもない。紙の種類から試刷り、（広告）でも第四ステート（包装紙）でもない。紙の種類から試刷り、（広告）でも第四ステート（包装紙）でもない。紙の種類から試刷り、（広告）でも第四ステート（包装紙）でもない。紙の種類から試刷り、（広告）でも第四ステート（包装紙）でもない。紙の種類から試刷り、（広告）でも第四ステート（包装紙）でもない。紙の種類から試刷り、（広告）でも第四ステート（包装紙）でもない。紙の種類から試刷り、（広告）でも第四ステート（包装紙）でもない。紙の種類から試刷り、（広告）でも第四ステート（包装紙）でもない。紙の種類から試刷り、（広告）でも第四ステート（包装紙）でもない。紙の種類から試刷り、（広告）でも第四ステート（包装紙）でもない。紙の種類から試刷り、（広告）でも第四ステート（包装紙）でもない。紙の種類から試刷り、（広告）でも第四ステート（包装紙）でもない。紙の種類から試刷り、（広告）でも第四ステート（包装紙）でもない。紙の種類から試刷り、（広告）でも第四ステート（包装紙）でもない。紙の種類から試刷り、（広告）でも第四ステート（包装紙）でもない。紙の種類から試刷り、（広告）でも第四ステート（包装紙）でもない。紙の種類から試刷り、（広告）でも第四ステート（包装紙）でもない。紙の種類から試刷り、（広告）でも第四ステート（包装紙）でもない。紙の種類から試刷り、（広告）でも第四ステート（包装紙）でもない。紙の種類から試刷り、（広告）でも第四ステート（包装紙）でもない。紙の種類から試刷り、（広告）でも第四ステート（包装紙）でもない。紙の種類から試刷り、（広告）でも第四ステート（包装紙）でもない。紙の種類から試刷り、（広告）でも第四ステート（包装紙）でもない。紙の種類から試刷り、（広告）でも第四ステート（包装紙）でもない。紙の種類から試刷り、（広告）でも第四ステート（包装紙）でもない。紙の種類から試刷り、（広告）でも第四ステート（包装紙）でもない。紙の種類から試刷り、（広告）でも第四ステート（包装紙）でもな
夕暮れの制作年代を九〇年代とする根拠は、「一九二〇年の『ジシュツルム・アルパム』に一九三〇年の木版画『ホルツチネット』五点のうちの一つとしてこの作品が画版掲載されていることにある。同書の図版（26）『猶れ』（大版）（26）『おしゃべり』（26）に当たる。五点のうちの一つとして当作品が掲載されている頁で（図14）、他の作品は（渚にて）（26）、（夜）（大版）（26）、（夜）（大版）（26）のほぼ四倍の大きさで掲載されている。これら五点の版画作ぶりも重要位置を占めている。これらはカディンスキーがあえて大きく作り上げる目的を望んだためと思われ、もしそうしたとすれば、『夕暮れ』が一番大きく掲載され、版画ではほぼ同じ大きさで掲載されている。これはカディンスキーがあえて大きく作り上げる目的を望んだためと思われ、もしそうしたとすれば、『夕暮れ』が一番大きく掲載され、版画ではほぼ同じ大きさで掲載されている。これはカディンスキーがあえて大きく作り上げる目的を望んだためと思われ、もしそうしたとすれば、『夕暮れ』が一番大きく掲載され、版画ではほぼ同じ大きさで掲載されている。
ベリ画の《夕暮れ》（図17）は、あいおいの最初の作品で、建築モチーフの中に最も長く描かれ続けるのが教会である。これは地上と天上、俗と聖、現世と来世、形而上のものと形而下的ものの、物質的なものと精神的なものを作り出すという象徴性を帯びている。教会は、一九〇年代以降の抽象絵画にまで引き継がれている。その意味でも建築モチーフは重要なテーマである。

19. 第四回サロン・ドートンヌのカタログ

18. カンディンスキーの手帳 部分

16. ドートンヌの手帳 (1946-1949) には、一九四四年のサロン・ドートンヌへの発送リストが記されている(図18)。
カンディンスキーがロシアで生まれ育った時代の大部分、つまり一八六〇年代から八〇年代初めにかけてのロシアでは、美術においても文学においてもリアリズム盛期の時代であった。カンディンスキーの生まれた一八六〇年代の末から一八七〇年代初めにかけての美術の分野でも、リアリズムが主流になるのは一九〇〇年代後半に入ってからである。カンディンスキーが生まれた一八六〇年代から同世代の方々と同時に活動していた画家たちとは、同世代であったので、ロシア文化という大きな視野で眺めた場合、カンディンスキーは、リアリズムの中心で育ちながら、それを否定あるいは正反面で再掲すことによって芸術を社会や実在から切り離し、芸術を芸術として受け容れようとした世代に属している。そして一九二〇年代の前半に「カラフトアメ・アルバム」に収載された「回想」には、カンディンスキーが一九二〇年代に写した絵の一部を示す。
22. ボレーノフ「チベリアド湖畔で」
21. レビニン「フランツ・リスト」
20. レビニン「思いがけなく」

ロシアで成長していく中での美術体験が語られている。カンディンスキーは、モスクワの美術美術展でモネの「桜」を見る一九五〇年以前の美術体験を回想して、「ただ写実的な美術、厳密にいえばもっとロシアの画家たちをしか見たことがなく、レビニンが描いた肖像画、フランツ・リストの「思いがけなく」のくらべレイヒのものであった」（西田秀穂訳）と書いている。「回想」のロシア語版である九〇年代の「回想」では、この部分さらに詳しく回想されている。「それまではわたしの美術体験が、レビニンや川面に映る明るく描かれた木の姿が美しいこともあった」（西田秀穂訳）など、また半世紀後のこの頃に、「思いがけなく」に深い感情を受ける。「ロシアの」のロシア語版である九〇年代の「回想」では、この部分さらに詳しく回想されている。「それまではわたしの美術体験が、レビニンや川面に映る明るく描かれた木の姿が美しいこともあった」（西田秀穂訳）など、半世紀後のこの頃に、「思いがけなく」に深い感情を受ける。「ロシアの」のロシア語版である九〇年代の「回想」では、この部分さらに詳しく回想されている。「それまではわたしの美術体験が、レビニンや川面に映る明るく描かれた木の姿が美しいこともあった」（西田秀穂訳）など、半世紀後のこの頃に、「思いがけなく」に深い感情を受ける。「ロシアの」のロシア語版である九〇年代の「回想」では、この部分さらに詳しく回想されている。「それまではわたしの美術体験が、レビニンや川面に映る明るく描かれた木の姿が美しいこともあった」（西田秀穂訳）など、半世紀後のこの頃に、「思いがけなく」に深い感情を受ける。
カドンスキーと同時代のリーヴサンは、モククワ絵画・彫刻・建築学とのサヴラーソフとポーラーノフに学んだ。移動派の中では若き世代に属する風景画家である。カドンスキーが驚嘆したというリーヴサンの「表」（八九）は、四次元の構図で描かれる。すると和を融合するという風景画は、川が彼岸の世界を示し、彼岸の世界と彼岸の彼岸を示すという構図である。また水波とそれに映る反映はロシア風の美学を代わって世界末の「芸術の世界」の画家たちが好んで採り上げたモチーフである。

川、遠望に彼岸という構図で描かれており、象徴的な解釈をすれば、川が彼岸の現実世界と彼岸の彼岸の世界を区別することによってある。川の上に架かる橋や渡し舟によって、観者は彼岸の世界に導かれるという構図である。四次元のリーヴサンの「表」の中では映されたモククワの外的を示すというレリーフを描かれており、象徴的な解釈をすれば、川が彼岸の現実世界と彼岸の彼岸の世界を区別することによってある。川の上に架かる橋や渡し舟によって、観者は彼岸の世界に導かれるという構図である。四次元のリーヴサンの「表」の中では映されたモククワの外的を示すというレリーフを描かれている。
27. ヴル・ペリ（絵を描くデイモン）

28. ポレノフ（祖母の庭）

このレヴィターメンの世代の画家たちであった。

一八七〇年代のリリアムズ・モリスは、モスクワ近郊アブラームツェフに地を購入し、ここには七〇年代末にレピン、ポレノフ、V・ヴァスネツォフらが集まってアブラームツェフポリに地を購入し、そこには七〇年代末にレピン、ポレノフ、V・ヴァスネツォフらが集まってアブラームツェフポリに地を購入し、ここには七〇年代末にレピン、ポレノフ、V・ヴァスネツォフらが集まってアブラームツェフポリに地を購入し、ここには七〇年代末にレピン、ポレノフ、V・ヴァスネツォフらが集まってアブラームツェフポリに地を購入し、ここには七〇年代末にレピン、ポレノフ、V・ヴァスネツォフらが集まってアブラームツェフポリに地を購入し、ここには七〇年代末にレピン、ポレノフ、V・ヴァスネツォフらが集まってアブラームツェフポリに地を購入し、ここには七〇年代末にレピン、ポレノフ、V・ヴァスネツォフらが集まってアブラームツェフポリに地を購入し、ここには七〇年代末にレピン、ポレノフ、V・ヴァスネツォフらが集まってアブラームツェフポリに地を購入し、ここには七〇年代末にレピン、ポレノフ、V・ヴァスネツォフらが集まってアブラームツェフポリに地を購入し、ここには七〇年代末にレピン、ポレノフ、V・ヴァスネツォフらが集まってアブラームツェフポリに地を購入し、ここには七〇年代末にレピン、ポレノフ、V・ヴァスネツォフらが集まってアブラームツェフポリに地を購入し、ここには七〇年代末にレピン、ポレノフ、V・ヴァスネツォフらが集まってアブラームツェフポリに地を購入し、ここには七〇年代末にレピン、ポレノフ、V・ヴァスネツォフらが集まってアブラームツェフポリに地を購入し、ここには七〇年代末にレピン、ポレノフ、V・ヴァスネツォフらが集まってアブラームツェフポリに地を購入し、ここには七〇年代末にレピン、ポレノフ、V・ヴァスネツォフらが集まってアブラームツェフポリに地を購入し、ここには七〇年代末にレピン、ポレノフ、V・ヴァスネツォフらが集まってア布拉

苦笑と同時世のレヴィターメンについて、著者には Paneの教え子の一人であり、クライズの

抒情的風景画の伝統を引き継いだ。そして世紀末のロシアに、八九年代に誕生した芸術の現実に属したのは、

東アジアの象徴主義は、七〇年代のワ・ナロード運動が挫折したのちの社会状況から生まれた不安と危機意識から、新鮮さや装飾性を含む装飾芸術を特色とする。アブラームツェフの選れた地について、新鮮さや装飾性を含む装飾芸術を特色とする。アブラームツェフの選れた地について、新鮮さや装飾性を含む装飾芸術を特色とする。アブラームツェフの選れた地について、新鮮さや装飾性を含む装飾芸術を特色とする。アブラームツェフの選れた地について、新鮮さや装飾性を含む装飾芸術を特色とする。アブラームツェフの選れた地について、新鮮さや装飾性を含む装飾芸術を特色とする。アブラームツェフの選れた地について、新鮮さや装飾性を含む装飾芸術を特色とする。アブラームツェフの選れた地について、新鮮さや装飾性を含む装飾芸術を特色とする。アブラームツェフの選れた地について、新鮮さや装飾性を含む装飾芸術を特色とする。アブラームツェフの選れた地について、新鮮さや装飾性を含む装飾芸術を特色とする。アブラームツェフの選れた地について、新鮮さや装飾性を含む装飾芸術を特色とする。アブラームツェフの選れた地について、新鮮さや装飾性を含む装飾芸術を特色とする。アブラームツェフの選れた地について、新鮮さや装飾性を含む装飾芸術を特色とする。アブラームツェフの選れた地について、新鮮さや装飾性を含む装飾芸術を特色とする。アブラームツェフの選れた地について、新鮮さや装飾性を含む装飾芸術を特色とする。アブラームツェフの選れた地について、新鮮さや装飾性を含む装飾芸術を特色とする。アブラームツェフの選れた地について、新鮮さや装飾性を含む装飾芸術を特色とする。アブラームツェフの選れた地について、新鮮さや装飾性を含む装飾芸術を特色とする。アブラームツェフの選れた地について、新鮮さや装飾性を含む装飾芸術を特色とする。アブラームツェフの選れた地について、新鮮さや装飾性を含む装飾芸術を特色とする。アブラームツェフの選れた地について、新鮮さや装飾性を含む装飾芸術を特色とする。アブラームツェフの選れた地について、新鮮さや装飾性を含む装飾芸術を特色とする。アブラームツェフの選れた地について、新鮮さや装飾性を含む装飾芸術を特色とする。アブラームツェフの選れた地について、新鮮さや装飾性を含む装飾芸術を特色とする。アブラームツェフの選れた地について、新鮮さや装飾性を含む装飾芸術を特色とする。アブラームツェフの選れた地について、新鮮さや装飾性を含む装飾芸術を特色とする。アブラームツェフの選れた地について、新鮮さや装飾性を含む装飾芸術を特色とする。アブラームツェフの選れた地について、新鮮さや装飾性を含む装飾芸術を特色すると
カドニスキーの《夕暮れ》を同時代のロシア絵画に照らし合わせた時、まず注目されるのがペヌア（図28）の《ソーモフ》（図29）、索モフ（青いドレスの婦人）1898-1900年である。ソーモフ、カドニスキー、ならびにソーモフの作品《夕暮れ》は、ロシアの美術界との関係は深く、様々な形で関わりを持ち続けている。ソーモフは1906年に《公爵夫人の水浴》1896年（図28）を製作したが、この作品はソーモフの代表作とも言える。ソーモフの《夕暮れ》は、ソーモフがロシアで最も有名な作品であり、その美しさは世界中で広く認識されている。

ソーモフの《夕暮れ》は、ロシアの美術界においても大きな影響力を持ち、特にソーモフの作品《夕暮れ》は、ソーモフの美術アカデミーで学んだ後、一九九五年から三年間ルーラで勉強した。ソーモフの《夕暮れ》は、ソーモフの美術アカデミーで学んだ後、一九九五年から三年間ルーラで勉強した。ソーモフの《夕暮れ》は、ソーモフの美術アカデミーで学んだ後、一九九五年から三年間ルーラで勉強した。ソーモフの《夕暮れ》は、ソーモフの美術アカデミーで学んだ後、一九九五年から三年間ルーラで勉強した。ソーモフの《夕暮れ》は、ソーモフの美術アカデミーで学んだ後、一九九五年から三年間ルーラで勉強した。
IV ミュンヒェンの美術界

ミュンヒェンは、アントン・アジュペによってブラームスの管弦楽曲を演奏するためのの場や、シューマンの交響曲を演奏するためのの場として知られていた。ミュンヒェンの音楽は、新旧の交流を求める若き音楽家たちに大きな影響を与えていた。アジュペは、ミュンヒェンの美術界においても活発な活動を行っていた。彼は、新旧の美術家たちをつなげる役割を果たしていた。

しかし、ミュンヒェンの美術界は、アジュペの死後も活発に活動を続けていた。特に、アジュペの門下生たちの活動が活発であった。アジュペは、その門下生たちを指導し、彼らは、新しい美術の潮流を黒くするため、ミュンヒェンの美術界においても活発な活動を行っていた。

アジュペの死後、ミュンヒェンの美術界は、アジュペの死後も活発に活動を続けていた。特に、アジュペの門下生たちの活動が活発であった。アジュペは、その門下生たちを指導し、彼らは、新しい美術の潮流を黒くするため、ミュンヒェンの美術界においても活発な活動を行っていた。

アジュペの死後、ミュンヒェンの美術界は、アジュペの死後も活発に活動を続けていた。特に、アジュペの門下生たちの活動が活発であった。アジュペは、その門下生たちを指導し、彼らは、新しい美術の潮流を黒くするため、ミュンヒェンの美術界においても活発な活動を行っていた。
34.《6人の裸婦立像》1897-1900年

33.ルポック 19世紀 カンディンスキー旧蔵

義に反対して、「ミュンヘン分離派」が、ウィーンとベルリンの分離派（それぞれ一九二七年と九八年に先駆けて設立された。ミュンヘン分離派が画期的だったのは、一九二七年後半のロッパ美術の様子を動向を展覧会で紹介したしであること、ウィーン・ミュンヘン美術の発展の存在があらためて明らかになっていたからである。」

実際、当時のロシアの美術界は分離派以降のミュンヘン美術の影響を受けており、分離派が勢力を拡大したのは、ミュンヘン美術の発展を支える力であった。ミュンヘン美術は、特に一九八六年に創刊された「シュヴァルトツァール」がミュンヘン美術の形成を助けてきた。この運動の指導者オーストは、この運営の指導者であり、ミュンヘン美術の影響を受けていた。
36. 魚と花のモチーフによる
指輪のためのデザイン
1904年頃

35. オプシスト
ミュンヘン分離派展に出品された刷り込みのラグ
1897年
Hans Konrad Roethel: Kandinsky: Das Kleeplastische Werk, Kehlin, 1970, no. 2, color ill. (another impression)
Hans Konrad Roethel: Kandinsky: Das Kleeplastische Werk, Munich, 1966, no. 3, color ill. (another impression)

Kandinsky: Das Kleeplastische Werk, Zun 100 Gebrüder Stilgiebsche Galerie in Konstanz, Munich, 1966,innen (another impression)


Kunstauktion der Stimp, Berlin, der unkon.

Sotheby's Salon d'Automne: 2. Exposition, Salon des Beaux Arts, Paris, Okt. 15-Nov. 1904

Private collection, Japan


Provenance

hue: no: 98-FP-001
Slice: 48x14mm (left and lower borders)
Medium: wooden on paper
Date: 1903

Title: Byrning (Abend)